

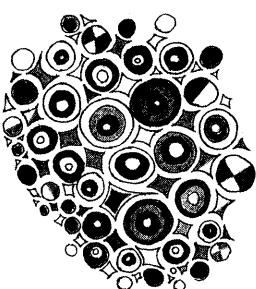
輝やく顔を生み出す保育

津守 真

ベトベトをこねる

ひとりの子どもが私の手をひいて職員室にいった。その子は私よりもひと足早くに走ってゆき、ひとりの職員のふだん鍵のかけてある机のひき出しに手をかけた。その日はひき出しがすぐにあき、アラビア糊のびんが目についた。その子はうれしそうにこつと笑ってそのアラビア糊と、机の上のガラスの灰皿をもって私の机にきた。そして、灰皿の上にアラビア糊を、最初は一滴ずつ、次第に二滴三滴とたらし、最後には容器の口を取ってドロドロとたらし、手をベトベトにしながら灰皿を糊でこねまわした。ときどき私をみながら、良い顔をしてひとしきりたのしんだ。私もその子のベトベト好きはよく知っていたので、口をさしはさまずにそれを見守った。

この子は昨年一年間、担任の先生と、糊やえのぐのベトベトを手に一杯つけ、物にぬってこね、あたりをベトベトにした。そうしながら大人によりかかり、大声をあげた。その仕方は、大人にぴったりとくつづくのもなく、はなれるのでもなく、体重を中途半端に支えることになるので、相手をす



るのもらくではなかった。担任の先生はそのベトベトをこねるのをいやがらずに、長い時間その子とつき合っていた。この子はその先生との間でベトベトをやりきることによつて、大人に対する信頼を学んでいたように思われた。最近は、この子どもは美しい色でガラス窓を塗つたり、裏庭で材木にえのぐをぬつたりして、自分で遊べるようになつてきている。

この日、私は久しぶりにこの子とベトベト遊びをやつた。ベトベトが好きなことは前も同じなのだが、以前のように大人にだだをこねるのではなく、その子はひとりで坐つて灰皿に糊をぬりつけると水道の流しできれいに洗つた。そしてすつきりした顔をしてひとりで保育室にもどつていった。

同じようにベトベトをこねる行為も、どつちつかずの不安定な感情の中に寛じこめられてするのではなく、いまは物質の感覚をたのしむ遊びになつてゐる。子どもは距離をへだてて自分の感情を眺めているようなところがある。いまになって考えると、この子どもは人に対する信頼と不信との間を流れ動いていて、その混乱した感情がこの行為を創り出していたのではないかと思われる。だだをこねながらベトベトをこねると、大人はその行為自体を受けいれきれなくなつて、事態は悪化する。そのようなときに、担任の先生は、この子どもの行為と感情をよく受けとめ、その大人を通して、この子は不信ではなく、信頼を選びとることができるようになったのだと考える。

信頼と不信のはざまで

いまだもベトベトをやらせてあげるのは、ときによつて容易ではない。この日、いつも鍵がかかっているひき出しの中にアラビア糊が入つてゐるのをこの子は知つていたに違いない。でも、このひき

出しにははんこも入っているし、先生の大事な物が入っている。ひき出しがすぐにあいたときには私もびっくりしたが、この子のうれしそうな顔をみると、すぐとめる気にもならない。こんなとき私はいつも葛藤の中に立たされる。アラビア糊を出したあと、他の物に手を触れないように私はすぐにひき出しに鍵をかけることができた。だがもしも私がそうしたら、その子は私に不信感を感じただろう。実際この子は何度もこのひき出しにもどり、べトベトにするものがないかを確かめた。

保育のあとでその先生にこの日の話をすると、笑って許容してくれた。同じ保育の場で、その人もまた同様の葛藤を経験している。子どもの側の感情がもつれているときには、その子の無意識の表現は、しばしば、大人が簡単に受けいれにくくことに向かう。大人に葛藤を起こさせるのだから、大人は自分自身の中で、また職員同士の間で、その葛藤を生きなければならない。それにどのように対処してゆくかは状況によって異なり、答えは一様ではない。いずれにせよ大人自身の戦いがなかつたらば、子どももまた自らの中の葛藤を乗りこえることができないのではないだろうか。

この日の私との間のべトべト遊びは、二年間にわたるいくつもの山を越えた後の小さなエピソードにすぎないのだが、この子どもと久しぶりにつき合って、べトベトをこねる行為をべトベト遊びにまで導びいた担任の先生と、この子どもとの関係の成長を思わされた。

製作に没頭する子どもたち

ある半農半漁の地域の幼稚園を訪問したときのことである。たまたま五歳児のクラスにいった私

は、すぐ傍の机でひとりの女の子が、箱に長方形をマジックでかいているのに気をひかれた。その子は長方形の上に三角形をつけた。窓の上の日除けひさしかもしないし、家の屋根かもしない。家の外側である。それからその子は画用紙を切ってテーブル、椅子、ベッドなどをつくり、箱の中に家の内部を作った。これで家の内部と外部と両方ができた。よく見るとわきにいくつも箱が並べてあり、ひとつの箱にはふたが立ててあって、華やかな髪飾りをつけ、花のドレスを着た四人の女の子が描かれていた。先週からその子はこの家を作っていたという。この日も朝からそのつづきにとりかかつて、帰るまで二時間半ほど、その場を動かさずに作りつづけていた。男の子たちもわきで箱を重ねて熱心にロボットを作っていたが、よく見ると、ロボットの内部には家具が備えてあつたり、迷路が作られている。ここにも内部と外部の統合のテーマがある。

ふと、私は二十年以上も前に、私の子どもたちが同じように家の内部と外部を作り、華やかに着飾った女の子を描き、互いにしゃべり合い見せ合いながら、毎日のように製作して遊んでいたことを思い出した。そのころ私がしばしば出入りしていた附属幼稚園でも、毎日つけられていたお店やは、いろいろに工夫されたお弁当や、さまざまな形の時計やカメラが並べられ、手にとると楽しい発想が感じられた。昭和三十年代の附属幼稚園や我が家でよく見た光景である。

この日、私は久しぶりに、幼稚園で製作に没頭する子どもたちの姿にふれた。この子どもたちは、ほかのこと気に散らされずに、自分の心の中に湧き出たアイディアを製作に表現しようとしている。この幼稚園は半農半漁の地域で、高層マンションに住む人は皆無であり、ほとんどの人が祖父母と同居しているという。いわば三十年前の生活形態が保たれている。その上に入園以来三年間にわ

たつて培われた、子どもがはじめる活動を大切にしてきた生活があり、いまその最後の時期に至つて輝やくばかりに自信にみちた自己認識がある。描かれた女の子たちは最高に着飾り、内なる自分となる自分とが力強く統合されている。ここでも子どもたちと保育者との関係の成長を思はされた。

能動性と疑惑とのはざまで

最近私は障害の子どもたちの中にいるから、こういう華やかな製作に出会わないのかもしれない。だがそれだけではなさそうである。その背景には、社会変化に伴う子どもたちの生活の変化があるのではないか。高層マンションに住む子どもたちは、自分でドアを開けて外に出てゆく経験をしたことがない。ソファからとびおりるだけで階下の住人から苦情を言わされることも珍しくない。

幼い子どもの中に自分から何かをしようとする能動性が生まれると同時に、走ればころび、されば熱く、それを避ける気持ちもはたらく。その両方の気持ちの間でためらいながら、子どもは能動性を選択してゆく。能動性に対する否定的な環境が大きすぎると、普通に幼児がさわったりめしたりするような経験をすることなく幼稚園の時期になってしまふ。そうすると幼稚園でその部分をていねいに保育して、他人や自分に対する信頼をたしかにし、能動性を選択するように自我を強めてゆくことが必要になる。その自我の形成の上に、創造的製作による自己表現が可能になるのではないか。

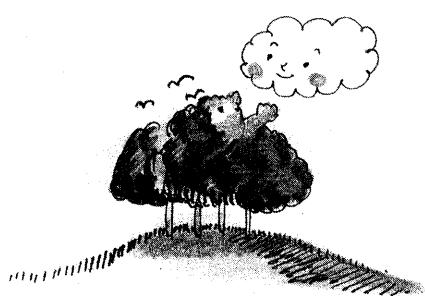
それでは現代の社会変化の中では、子どもの成長の上で何かが欠落するのだろうか。私はそのようには考えない。それぞれの子どもが生きる毎日の生活の中で、子ども自身が望み願つてることにこ

たえる保育をすることによって、製作による表現はなくとも、子どもの顔は輝やき、それぞれなりに健全に成長するだろう。社会の状況が変化すると、保育者はそれまでに自分が経験しなかつた新たな事態に直面し、子どもが生きている世界を新たな眼で考え直さねばならなくなる。このことはどの時代の保育者にも共通のことであろう。

(愛育養護学校)

小さな保育史

村山 英子



小さな保育史——それは、言い換えれば、昭和三十二年四月から今日までの、私がかかわった保育の歴史である。しかし、単に私ひとりの保育であるにとどまらない。おそらく今もそうであるように、当時の幼稚園のあり方は、さまざまであったと思われるが、私の保育もまた、時代の流れの中にある、当園の歴史の中にある。ほんの小さな一こまに過ぎないが、確実に存在した歴史の断片である。